

☆5月・6月・7月・8月の活動☆

採集観察会のお知らせ 東京都 「五日市町横沢入地区」

第1回 5月17日(日) 10時 雨天決行

●集合地点: JR線「武蔵増戸駅」(武蔵五日市の手前の駅です!)

世話人は新海栄一 (TEL. 0423-21-0289) ・笹岡文雄

あとと便利な物; 昼食・野帳・ルーペ・標本保存用の消毒用エタノール・採集びん

○今年度は同地区で5月17日, 7月12日, 10月18日, 2月21日に行います

合宿の案内 7月25日(土)~27日(月) 伊豆松崎町「雲見」 ●地図など別記

●宿泊 温泉民宿「吉右衛門」 TEL. 0558-45-0358

世話人は新海明 (TEL. 0425-22-2605) ・高橋祐子

合同例会の予定 場所「目黒区立駒場住区センター」

12月6日(日) 予定 10時 次回の通信で再度お知らせします

世話人は多足類懇談会の桑原幸夫氏

総会・例会報告

26. Apr. 1992

駒場住区センター 記録: 池田.

(1) 開会あいさつ 新海栄一 (2) 自己紹介 司会進行: 熊田. 映写: 金野

(3) 午前の講演 10:40~12:00

①谷川明男「日本産ゴミグモ属クモ類の検討(まとめ)」: 西表島の未知のゴミグモの正体を知るために始めたゴミグモの分類学的研究は, 日本産ゴミグモ属の全種の検討に発展した. タイプ標本も検討し, このたび一応のまとめを行った. 論文は日本クモ学会誌に投稿する.

②笹岡文雄「最近集めたクモの雑貨その2」: クモ・グズのいろいろ. 絵本 (Amazing Spiders, Very Busy Spider), クロゴケグモのボールペン, クモをあしらった髪どめ, ストッキング, 吊り下げるぬいぐるみ等を主にスライドで紹介した. (他にベレー帽用バッジ, お菓子, 指輪もある [松本]).

③梅林力「クモのトレーニング, クモも遊ぶか」: 自宅の天井の蛍光灯からアオオビハエトリが下りて来た. 途中まで下りると糸を伝わって上った. 上り下りを1時間半も繰り返した. このクモは体操でもしていたのか. (このクモの行動について, 野外で糸から下がるのは休息時の危険回避だが, このクモは夢遊病だった! 下に下りようとして躊躇を繰り返した等, 議論になりました)

(4) 写真撮影 (5) 昼食

(6) 総会 13:10~14:20

昨年度の活動報告, *決算報告・承認の後, *役員改選の後, *今年度の活動計画・*予算案の提案が行われ, 若干の修正を経て, 承認されました. 昨年度の活動についてはすでに通信でお知らせしているので, 省略します. *印の事項については本号のあちこちに記しました.

会誌KISHIDAIA (63) 号がこれまでの印刷所で引受けてもらえなくなり, 印刷所を探すのに手間取

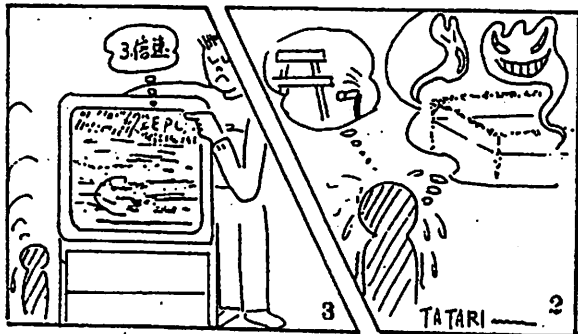
り、発行が遅れておりますが、今年度8月の(64)号、2月の(65)号も鋭意発行の予定です。会員の皆様、ふるって原稿をお寄せ下さい。Drag Linesも募集しています。

(7) 午後の講演 2:25~6:00

④池田博明「野外でコモリグモとヤチグモの見当をつけよう」：野外で同定するときの裏ワザを紹介した。ただし、あくまでも見当をつけるのであって、発表するときは種名を生殖器等で確認のこと。VTRで「ネコハエトリの性モザイクの威嚇行動」を紹介した。

⑤加藤むつみ「カブトガニの脱皮(VTR)」：分類学上は亜門の殿階でクモと同じグループのカブトガニの脱皮の様子を撮影できたので、クモの脱皮と比較してほしい。カブトガニの脱皮は頭部の先端から始まる。仰向けにしても脱皮できる。

② 近況・私の近況は「あり(めい)ふ(てい)でん」でん...
「近況はありふるといふ(てい)でん」...
と文句をつつ... 今度には何のせいかわかんない...
フ、フ、フ、...



《ミニ・シンポジウム ジョロウグモ研究の最前線》 座長 新海明

⑥吉田真「ジョロウグモの網特性と餌内容 コガネグモ・アシナガグモなどとの比較」：クモの網にかかる餌は、網場所、造網時刻、網特性によって決まる。溪流沿いと疎林で水平円網・垂直円網7種の網特性を調査し、比較解析した。ジョロウは糸の強度は弱い、本数が多いため餌の抑止力は大い。網に残された餌もサイズは多様で大型餌も多かった。

⑦徳本洋「ジョロウグモの生活史」：照葉樹林帯に分布する。沖縄のものは生活史形質が本州のものと異なる点が多い。金沢市の調査ではかなりの越冬卵のうが被害される。被害の様子から、加害者は鳥と目される。鳥の分布からすると、コゲラやシジュウカラの可能性が高い。

⑧新海明「ジョロウグモの網についてのHowとWhy」：造網のときに、分枝と二分割によって縦糸を増していく。足場糸を切らずに残すのは縦糸を増やす工夫ではないか。細かい網は小型餌を取るための工夫と推察される。(分割したために弱くなった強度を増すために足場糸を入れるという考え方も可能ではないか[吉田])。

⑨宮下直「ジョロウグモの捕食量に対する小型餌の重要性」：見取り法とVTRによる記録のふたつの方法で検討し、ジョロウの捕食する餌のサイズを調査した。ふたつの方法で餌サイズの分布は同様だった。ジョロウは小型餌に依存する割合が高い。ジョロウはまめに小型餌を回収するため、網に小型餌のカスは残らない。都心では中大型の餌が少なくなるが、ジョロウはバッファ的な小型餌の利用のおかげで、都市部でも数多く生存している。

⑩林秀幸「ジョロウグモの性フェロモンの研究」：最終脱皮をした1~3時間の雌に対して成体雄が定位・接触などの行動をする。この行動は亜成体雌や成体雌に対するものより有意に高かった。風洞実験により、大気中を伝わる化学物質の存在が示唆された。

⑪シンポジウム自由討論：亜成体雌にジョロウの雄が入る要因はなにか、またそれはなぜか。個体

数変化と鳥による捕食圧の関係はどうか。小型餌への対応とジョロウはAttack Wrappingしないことも関連しているなどなど。

(8) 閉会あいさつ 徳本洋 (9) 懇親会 乾杯・あいさつ 吉田真

参加者(50音順)：浅間茂，池田博明，梅林力，小澤実樹，小野展嗣，加藤輝代子，加藤むつみ，金野晋，木村正吾，木村知之，久保田克哉，熊田憲一，小峠光弘，笹岡文雄，貞元巳良，佐藤恭子，佐藤邦人，佐藤幸子，新海明，新海栄一，鈴木成生，高橋登，高橋祐子，谷川明男，徳本洋，長井芳夫，中島祥吉，中島晴子，萩本房枝，畑守有紀，林秀幸，古浜隆，前川隆敏，松本誠治，宮下直，吉田真 36名：京都・大阪・福井・石川・静岡など遠方からも参集されました。

近況報告 例会・総会出欠ハガキより転載させていただきました(順不同)

■石野田辰夫(宮崎郡)；合同例会の記録を見て、皆々様の熱心な数々の御研究の発展を大変嬉しく思いますと共に、会への出会に胸おどるものがありますが、新年度までは朝早くから夕方まで学校の仕事に追われそうです。4~6月は全く動けないと思います。クモも方はデグモを見て歩きながら、アリグモを追っています。アリグモの種類がもっと沢山生息しているようすだし、雄の大顎の働き、生活や生殖行動で果たす役割が気になるのです。皆様も注目して下さいませんか。進化の上でトップランナーのアリグモを追っかけるのも面白いですよ。行動は日照と関係が深いように思っています。(石野田氏から例会に多額の御厚志をいただきました)

■濱田龍一(福山市)；1年以上体調をこわし入院生活を続けていましたが、ようやく復調し、職場復帰のめどもついている状態です。仕事の方はクモ中心の課題となりそうでうれしいのですが、20年来”積んどく”の状態にあった文献を読んでいくのは一汗かきそうで少しビビっています。皆様にとっては幼稚な質問が出てくると思います。しかし、おめず臆せずやるつもりですので、よろしく御指導を賜りたいと念じております。

■徳本洋(金沢市)；通信No.74に載っていた新海明さんの「クモガタガガンボを追って」は、私も昨年末に同様の経験？をしました。何と金野晋さんが、私がクモガタガガンボを何匹も白山で採ったと聞くと、やはりジープで駆けつけ、彼は何と真冬に一人でテントを張って野宿して頑張ったのです。成果は期待ほどではなかったのですが、それでも1~2匹は採れたようです。私は金沢のド真ん中、金沢城址でも12~1月に3匹採っています。金沢よいとこ、一度はおいで!!

■小野展嗣(東京都)；今年7月にオーストラリアのブリスベンで行われる国際クモ学会会議に出席する予定です。何かの機会にご報告します。

■千国安之輔(穂高町)；片岡佐太郎氏ご逝去の訃報には驚きました。たしか小生と同年輩ではなかったかなあ。小生の終着駅もすぐそこに見えているような気がする。うかうかしてはいられない。あれもこれもと気がせくばかり。そんなわけで例会には失礼します。

■田中穂積(富田林市)；なかなか東京までが遠くて、最近少し時間ができたのですが、あまり仕事は進んでおりません。皆様によりしくお伝え下さい。

■小滝一孝(東京都)；マツのこも巻きをのぞいたり、木の皮をはいたり、冬でもクモと対面した楽しんでいます。熊田さんに同定していただけて幸いです。

■海老原恵昭(小学4年。茨城県勝田市)；入会して9ヶ月、親の都合で採集観察会に参加できませんでしたが、5/17は参加できそうです。初めてのことなので何を持っていくのか、場所はどこなのかと心配の毎日です。

■加村隆英(大阪市)；2月の下旬に西表島と石垣島に採集に行ってきた。ワシグモは4種採れ、満足しています。

■佐藤尚子(横浜市)；毎日元気にお花屋さんで働いています。お休みがとれなくて参加できません。すみません。

■近藤昭夫(船橋市)；昨年5人いた所属学生5名のうち、M2の板倉君はめでたく理学修士の学位を取得し、研究室を去ることになりました。4年生の2名は卒業後就職、残りはこの4月にD2になる鈴木君と4年生の1名が研究生で新しい4年生はいない予定です。6月には理学部4号館が完成の予定でその2階半分くらいが動物飼育室になります。仮設飼育室からの移転は7月下旬になりそうです。ヒマと関心をお持ちの方は夏休みにでも見学に来ませんか。お待ちしております。

■藤井靖浩(東京都)；研究の条件は好転するのではと期待しています。しかしゴミのかたづけ(データの山の整理のことです!)に、まだ時間がかかりそうです。ゴミから宝が出せるかどうか、不安です。が、ともかくかたづけなくてはなりません。

■板倉泰弘(静岡県)；急ですが、思う所あって、クモから離れようと決意しました。決してクモが嫌になったり、自信を失ったというような否定的な理由ではありません。私としても、クモを一生つづけていきたいと思っていましたが、別の方を取ることにしました。

■畑守有紀(福井県)；キシノウエ、キノボリ、カネコの3種のトクテグモの飼育を続けています。冬場は餌が少なくて厳しい。ショウジョウバエ以外、何かいい餌はないものでしょうか。

■笹岡文雄(東京都)；今年の冬はキシノウエトクテを自室で越冬させたために暖房が使えず、閉口しました。

■笠原喜久雄(浦和市)；1992年2月22日(土)、国立科学博物館主催の自然史教養講座に、小野展嗣先生の「あみを張るクモと張らないクモ」というのがあることを知り、参加しました。クモの名前を覚えることだけに汲汲としていた初心者私にとって、クモの生態と形態や、進化の様子との関係などについての話は大変参考になりました。

■佐藤幸子(横浜市)；この頃、風邪ばかり引いて居ります。本日(3月10日)、庭の雑草を取ってましたら、石の下にハンゲツオスナキグモの♀が網を張って元気で居りました。ササグモ、ウツキコモリグモも元気でした。

■井野文雄(東京都)；建設省の砂防溪流環境調査の仕事で大わらわです。項目にクモがあれば勉強になっていいのですが、出張のついでには観察していきたいと思います。

■新海栄一(東京都)；ヨシダサヤヒメグモ、クロヤマシログモを東京で採集しました。産地はマル秘です。

■宮下直(東京都)；最近ジョロウに関する調査結果をすべてペーパーにすべく論文書きに追われています。

■小澤実樹(東京都)；あれもこれもやりたいという気持ちばかりで、なかなか進みません。この夏はクモの生態をじっくり見たいと思っています。

■中平清(高知県)；拙著『白帯日記』にお寄せいただきましたご意見・ご教示を基に理論の再構築を試みっていますが、なにぶん「たたき大工」のような小生のこと、基礎工事もならず弱っています。また、「利己的遺伝子は動物行動学の切り札となった」とのことに驚き、とまどっています。「利己」と「利他」は行動の表裏であり、「自分の為」と「種族の為」とは原因と結果のような事ではないか、と思っている小生には、利己的な面を強調することは、ダーウィンの進化論を個人主義、競争主義を正当化する道具とした西欧人と同様、利己主義的風潮の激しい現代社会を正当化する道具にされそうにも思うのです。年寄りの愚痴と申しますか、とにかく思う事の多いこのごろです。

■須賀瑛文(岐阜県可児市)；先日、中部蜘蛛懇談会の平成4年度の行事計画(前期分)を幹事等が

集まり、計画しました（別記）。

■八木沼健夫（大阪市）；参加できませんので、近況ならびに最近のニュース（別記）をお知らせします。4月から完全に教師生活から離れました。未解決のsp.のクモ、どなたか助けていただけませんか。気に体がともなわず。

■池田博明（神奈川県）；クモとは関係ありませんが、私がいちばん好きな作家ヴォネガットの小説『ホーカス・ポーカス』（早川書房）が出ました。また、ヴォネガットの『ガラバゴスの箱舟』はJ・グールドの未訳の『素晴らしい生命 Wonderful Life』に取り上げられています。グールドの本はバージェス頁岩に残された奇妙な動物についての魅力的な本ですが、カンブリア紀の古生物の本で、訳され^る心配です。竹内久美子批判を粕谷英一が書いています（『現代思想』5月号）。奥本大三郎の新訳ファール昆虫記（「すばる」5月号）はいよいよクモの章になりました。

トビックス

クモ学昨今

八木沼健夫

1) ポーランドのブルシンスキー氏から、久しぶりにたよりあり、「しばらくアメリカにいたが、帰ってからは、破産しかけた研究所の再建に努力中」とか。「アジアのハエトリグモの論文も原稿は出来ているが、なんとか出版したい」とのことです。

2) カナダの昆虫学者が日本の筑波山と北海道の定山溪で採集したクモを同定してくれとて、莫大な数のクモを数十本の管びんにギュウギュウづめにして送って来ました。日本のクモのことだから、NOとは言えず、引き受けましたが、ほとんど幼体で弱っています。その中に*Clubiona propinqua*らしきもの、*C. hummeli*らしきものがあり、目下林俊夫氏と研究中です。

3) 「ワシグモ科の*Kishidaia*を*Poecilochroa*のシノニムにしたから悪しからず」と白甲麻氏からのたよりあり。加村氏とともに首をかしげています。

【白氏の論文はKorean Arachnologyに出ています。韓国で既知種に同定していた種は実は新種だったというもの。この両属は前の糸いぼがかなり長いかな否かで区別するようです（池田記）】

■観察採集会のお知らせ 中部蜘蛛懇談会

会員外の参加も歓迎いたしますので、どうぞ、

8月28日（日）豊田市付近の観察採集会（係は緒方 TEL.0566-83-4474）

8月16日（日）養老の滝付近の観察採集会（係は須賀 TEL.0574-65-1347）

日本蜘蛛学会 大会の御案内

8月22日（土）10時～ 23日（日）15時 長野県松本市

大会委員長 千国安之輔

大会事務局 新海栄一（TEL.0423-21-0289）

運営協力 東京蜘蛛談話会 会員有志

出版案内 ☆ 小野展嗣 編著『くらしの昆虫記』（日本経済新聞社）

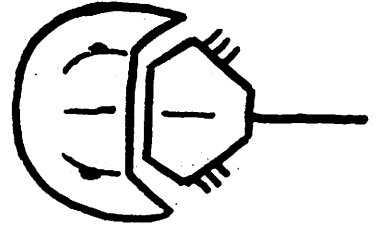
家庭の中の衛生害虫や身近な虫を中心に取り上げた新聞連載が本にまとまりました。クモはもちろんのこと、あまりパツとしないハエや多足類についても、くわしく紹介されています。1400円。

☆ 関口晃一著『カブトガニの不思議』（岩波新書）

下田の筑波大学附属臨海実験所の関口先生のスリッパにも描かれているというカブトガニの図が傑作です。

この本には談話会会員の加藤むつみさんの仕事も出ています（p188）

ところで『沈黙の春』（1962）で有名なレイチェル・カーソンに『海辺』を書かせるきっかけになったのは、カブトガニだそうです。



☆ 中島はる 作曲『小さな青い星』（全音楽譜出版社）

中島晴子さん作曲の『魔法の小箱』につぐ、五指でひけるピアノ導入時の小曲集。動物や自然を表した曲がたくさん収録されています。1030円。

●「遺伝」8月号はクモ特集の予定です。お忘れなくお求め下さい。

●長井芳夫氏が『クモの生理生態事典』（池田博明自刊）の種別索引を作って下さいました。御希望の方は池田まで御連絡下さい。お送りします。

【1991年東京蜘蛛談話会】クモ12大ニュース 自薦・他薦・独断で選ぶ12大ニュース

①フクログモの捕食者としての役割が評価された

国見裕久・茅洪新氏の酵素標識抗体法による研究によってチャハマキに対する捕食者として、フクログモの働きが大きいことが分かった。捕食量を評価できるすぐれた方法であるばかりでなく、これまで天敵としての役割が正当に評価されなかったフクログモの復権になった。

②スズミグモ、ついに東京に現る

神奈川県を分布の東限としていたスズミグモが、ついに東京に出現した。発見したのは熊田憲一氏で、1991年7月18日、東京都八王子市の南浅川であった。幼体で水平のドーム網を張っていたという。今後、埼玉県・千葉県など関東東部各県での発見に期待がかかる。

③怒っているか、愛しているか、それは顎で分かる

ハエトリグモの雄が脚をふり上げながらメスに求婚する有様はよく見られ、つとに有名であるが、時には雄に出くわすこともある。このときの威嚇行動は求愛のポーズと瓜ふたつであり、いままで区別が出来なかった。ところが、前川隆敏氏はネコハエトリの求愛と威嚇は脚のふり上げ段階からはっきりと区別できることを見いだした。氏によると、求愛の際には雄が顎を前へ出すという。今後は求愛行動の解析もこのような新たな視点からの研究が進められそうである。

④サカグチトリノフンダマシ、埼玉県で採集

トリノフンダマシ類の中でひとときわ光彩を放つクモ、サカグチトリノフンダマシが平松毅久氏によって採集された。埼玉県初記録である。1991年6月9日、埼玉県日高町の巾着田付近で、ヒノキの枝間のしおり糸上にいた。体長4～5mmの幼体で初めはアカイロと思ったとのこと。

⑤キジロオヒキ大収穫

1991年8月の鳥取で開催された日本蜘蛛学会大会には金氏、南宮氏をはじめ韓国からのお客さまを迎えた。これに先立ち8月25日には東京の八王子城跡で歓迎の観察会が行われた。ここでキジロオヒキグモが採集された。そして鳥取まで移動する間に計6頭ものキジロオヒキグモが採れた。もっとも採集したのが、新海栄一・熊田憲一・貞元巳良・小野展嗣といったそうそうたる顔ぶれだったので、クモに気の毒というべきか。この他にも高尾山で新海・熊田両氏によりさらに4頭採集されている。

⑥金顎のムツトゲイセキグモ

すっかり普通種になってしまった感のあるムツトゲイセキグモだが、やはり採集回数は少なく、まだまだここに記録する価値があろう。特に採集した人が人だけになおさらである。その人、熊田憲一氏は意外にも珍品には全くといっていいほど縁がなく、いつも「一度でいいから珍品を」と願っていたようだ。しかし、1991年は当り年で、スズミグモに続き、八王子市の戸吹でついにムツトゲイセキグモを採集した。これは5月に松本誠治氏がビーティングによって採っていた所の再調査によって発見したものである。この他、五日市町の広徳寺で新海栄一氏が9月に2頭発見している。

⑦島根県でカトウツケオグモ

もっともツキまわっていた熊田憲一氏は、学会大会終了後に島根県安木市の清水寺においてカトウツケオグモのオスの幼体を採集した。線香花火の最後の輝きなどとやゆされながらも、やはり採集の達人の本領発揮といったところであった。

⑧見落とされていた円網の初期造網過程

「ワク糸からタテ糸、そして足場糸を張って最後にヨコ糸を張り円網が作られる」ことは、クモ研究者なら誰でも知っている。ところが、その初期の過程が極めて定形的な行動であることが内外の研究者に見落とされていたことが、新海明氏の調査で分かった。円網の作成といった基本的なことであるにもかかわらず、見落とされていたのは、きちんと観察していないうえに、既存の本からの安易な孫引きによると思われた。

⑨西表島のクモが解明され始めた

西表島産のクモ2種が、谷川明男氏によりズナガドヨウグモ *Dolichognatha umbrophila*, TANIKAWA, 1991, 大熊千代子氏によりイリオモテアシナガグモ *Tetragnatha iriomotensis*, OKUMA, 1991, として記載された。また、谷川氏により西表島からアカアシヒメグモ *Theridion rufipes*, ヨシダサヤヒメグモ *Coleosoma floridanum*, ツルギハエトリ *Plexippus pocoski*が記録された。また、吉田哉氏によって沖縄からカブトヒメグモ属として記載された2種はミジングモ属に転属され、ヤマトカブトミジングモ、アマミミジングモとなった。

⑩日本産のエダイボグモ属が明らかになった

加村隆英氏により、エダイボグモ *Cladothela* 属には、エダイボグモ *C. boninensis* のほか、チャクロワシグモ *C. oculinotatus*, ムナキワシグモ *C. unciinsignitus* が含まれることになった。また、ヒメチャワシグモ *C. parva*, KAMURA, 1991 が新種となった。

⑪ムツメカレハグモが記録された

諏訪哲夫氏が神奈川県厚木市で採集した六眼のハグモが、小野展嗣氏によって、日本新記録のムツメカレハグモ *Lathys sexoculata* と同定、報告された。なお雄は未発見である。

⑫北海道北端地域のクモ相の調査が進んだ

小野展嗣・熊田憲一・貞元巳良・新海栄一の四氏が1990年7月に行った北海道北端及び利尻島のクモ相調査の報告が発表された。2400頭、168種が同定され、中には3新種、2新記録種も含まれる。

[選定 新海明、池田博明]

WATCHING 新世界紀行・生き物たちの愛情物語 (TBS)

『新世界紀行』(TBS. 20:00-20:50) はわが家の人気番組である。ブルネイやイスラエル、インカ、アンコールワット、マチピチュ、コスタリカなど世界各地を見せてくれるが、生物学に関係のある内容として、1992年2月2日(日)にウオレスの足跡を探る、2月16日(日)に「生きものたちの愛情物語」を放映した。どちらも授業で使えるような内容で、特に「生きもの～」は代表的な求愛戦略の

紹介であった。主にオーストラリアで、ガガンボモドキの婚礼給餌、ウミウシの交尾、トリバネアゲハの羽化・求愛・交尾などの他、クモの映像も放映された。それだけではない。クイーンズランド博物館のレーベン (Raven) 教授も登場したのである。レーベン氏は日本蜘蛛学会員であり、今年の国際蜘蛛学会大会の大会委員長でもある。ジャンピング・スパイダーの雄間闘争やクロゴケグモの交尾など貴重な映像が見られた。(池田記)

会号のことば 私たちは楽しいから研究するのである

見ずして考えるは空虚なり。科学者たるもの、なんらかのきちんと選んだ生物についての細々とした経験科学的な細部に深く入りこんでみなければ、自然に対する正しい“感覚”(真の理解の、一種形容しがたい必要条件)をはぐくむことなどできない相談なのである。だからこそ、アリストテレスはイカを解剖して世界の永遠性を主張し、ダーウインは蔓脚類について四冊の本を書き、種の起源については一冊しか書いていないのである。アメリカのもっとも偉大な三人の進化学者・自然史学者であるG・G・シンプソン、T・ドブジャンスキー、E・マイアも、最初の業績はそれぞれ、中生代の哺乳類、テントウムシ、そしてニューギニアの鳥類の研究であった。

科学者たちがそれぞれ個別の問題に没頭するのは、その研究が重要な一般化をもたらすかもしれないといった壮大な(そして一人よがりな)理由のためばかりではない。私たちは楽しいから研究するのである。発見の純粋なよろこびの前では、その発見が重要かどうかなど問題にならない。私たちはまた、冒険のために、自分の幅を広げるために、研究する。

(グルード「作品100番」『フラミンゴの微笑』[早川書房]より)

会計報告		91年度 (決算)		92年度 (予算)		備考
収入	会費	768,800		436,800*		
	寄付	6,400				
	バックナンバー	32,500				
	別刷代	15,250				
	利息	13,770				
支出	刊行物作成費	253,200		270,000	→	会誌 2号分
	発送費	75,510		79,000		
	通信費・事務費	70,656		75,584	→	通信作成発送
	消耗品費	41,790		10,000		及び事務費
	前納分会費繰越	315,400*				
	特別会計へ繰込み	80,164				
	予備費			2,216		
計		836,720	836,720	436,800	436,800	

特別会計

積立金 521,309 + 91年度繰込み金 80,164 = 601,473 92年度積立金

新海 明

3月7日午前11時20分、羽田空港を飛立ち我々は一路四国の高知へと向かった。この旅行の目的は、中平先生と高知大学の種田先生にお会いすることと南方系の珍種ユアギグモの採集と少々(?)の観光旅行であった。お膳立てしてくれたのは高知大学出身の平松毅久さんである。

高知のはりまや橋につくと折りよくお昼どき、早速「鰹のたたき定食」に舌鼓を打ったしだいである。つまみにとった「のれそれ」は絶品。これはあなごの稚魚であることを後で知った。「食い物がうまい」これが高知での第一印象であった。

パンカラ、高知大学へ

その後、高知大学の種田先生の所に行く。先生は原生動物を材料にして行動生理学の研究をされているが、卒論は学生のやりたいことをできるだけやらせていく方針とか。今どきの理学部では珍しいことである。きっと中では肩身の狭い思いをされているのではないかなどと余計な心配をしてしまった。このような気風であるから所属の学生の意気は近ごろの大学の中にあっては、頗る盛んであった。パンカラの気風が色濃く残り、焼きとり屋へ場所を変えての飲みながらの議論は久々に学生時代に帰ったような気にさせられ、時のたつのも忘れさせられたものである。深夜に大学へ戻るとき正門で守衛さんに先生もろとも不審尋問される一幕もあった。当然ながら宿舎がとれるはずもなく、申し訳なくも先生の部屋のソファで一夜を過ごさせてもらった(・・が、そのソファの寝心地の良かったこと)。先生と交わした議論を反すうしながら四国第一夜の安眠をむさぼった。

くものふるまいと皿鉢料理

二日目はいよいよ中平先生のお宅へ伺う。はりまや橋からバスに乗り小一時間ほどで春野町の芳原へ着いた。すると先生が自転車でわざわざ出迎えて下さっていた。到着後、すぐに付近の山で採集を始めた。勿論ユアギグモを狙ったのであるが、それらしいクモが見つかったには見つかったのだが、あまりに小さくその場では判らなかった。二日酔いの頭ではそれほどの集中力も出ず、早々に採集は切り上げて山道を歩きながら、先生がクモの研究を始められたきっかけになったという細野善照さんの「クモの習性」をめぐるお話や利己的遺伝子についての最近の話題に関する先生の疑問など、相変わらずの熱心な研究心を垣間みせられた。先生のお宅に帰り着くとなんと「皿鉢(さわち)料理」が待っていたではないか。鰹のたたきをニンニクで食べるのは知っていたが、寿司が酢でなしに柚でしめられているのは初めての体験だった。とても柔らかく穏やかで上品な食べ心地が忘れられなかった。食事の合間に先生の草稿「続・くものふるまい」をみせていただく。数百ペー

ジにのぼるものだがすでに完成原稿であり、内容はもとより先生自らお書きになった挿し絵なども散りばめられており大変に興味深い記録が多く、できるだけ早く出版していただきたいものだという思いを強く持った。また、先生が細野先生のような「自分で観察したことだけからなる本」を書きたいとおっしゃっていたことが、私にはとても印象に残った。Kishidaia については Dragline に載る記事が大変興味深くかつ大事なものであるといっておられたことが、我々の考えと同じであり勇気づけられ、とても嬉しかった。話題は尽きず豊かな半日はあっという間に過ぎ、午後3時に今度はこの付近で談話会の合宿でもやりましょうなどと、無責任にも約束して（でも、これが本当になることがあるから談話会は怖い）お別れした。

うるかの窪川

中平先生のところですっかり長居をしてしまい、宇和島まで行く電車に乗りそこなってしまったので、高知城の見物をすることにした。見晴らしの大変よいところでまさに高知市の全景が見渡せる。ここは山内一豊の居城として知られ城内にはその妻が馬と共に銅像としてやはり建てられていた。なぜか、アイスクリンという東京でいうところのサーティワンのトリプル型のアイスがいたるところで売られていた。城下へ出ると日曜日ということで青空市場が路上で開かれていた。高知は刃物作りが盛んで何十軒もの刃物屋さんが店を連ねていた。そして、もうひとつ有名なのが干ものだろう。ここで鰯ぶしを買って、植木屋や野菜をひやかした。とくにトマトがおいしくて、野菜というよりその甘さと香りは果物というべきであった。夕刻に高知駅をたち、次の目的地は窪川である。全くの予定外の行動なのであるが、往々にしてこのような思い付きの変更がよい結果に結びつくものである。

土讃線窪川駅に降り立ったのが午後6時半というのに町はすでに深夜のごとく静まりかえっていた。この暗さはかつて東京都下の場末にもあったなつかしいものである。場当たりには旅館を探して泊まることにした。一泊朝食付きでナント3500円という信じられない値段。やはり正解だったと平松さんとほくそえんだ。夕食を食べにぶらりと窪川の町に出たが真っ暗やみで食堂などありはしない。ただ一見「恋さん」という赤ちょうちんをみつけたのみ、昨日が昨日だけに今夜は控えめにしようと意を決して、のれんをくぐった。ところがここがまた正解であった。煮込みとおでんの旨いこと、とくにコンニャクが田舎風の腰のあるもので、私は最高に気に入ってしまった。そこのおかみさんの四万十川の今昔の話をききながら地酒をかたむけ、挙げ句にあの旨いトマトまでサービスしてもらってしまった。おかみさんが言うには四万十川が有名になるのはいいが、その反面で川沿いの道路の渋滞が多くなり、河原にゴミが増え地元の人の清掃の負担が増えてしまったとのこと。日本中でおなじ問題が起きているのだなというのが実感であった。

翌日は生憎の雨模様であった。平松さんがいうには窪川のうるか（鮎のはらわた）は最高とのことで、雨の中を四国八十八ヶ所のひとつ岩本寺の門前にある鮎の店に行き「うる

か」を注文した。

四万十川から宇和島へ

四国、三日目は窪川から予土線に乗り換えて四万十川沿いに宇和島へと向かった。四万十川は窪川の町をはずれるとすぐに現れた。地図をみればひとめで判るように、この川は窪川までは太平洋に向かって流れ下るが、そこで一転して再び四国山中へと流れを変える。流路は山間部を蛇行し、そこを沿うようにまた貫くように道路や線路が走る。四万十川の全てが自然のままであるはずもなく、当然ながら国道や線路に沿っては川岸が固められて整備されていた。しかし、蛇行している川が一端そこを離れると川の両岸は全く手着かずの自然のままの様相を見せていた。この景観がこの川を有名にしているのだと納得した。これからも、そこに民家や道路が作られない限り四万十川はその姿を変えることなく流れるのであろう。

気がつくと1両編成のワンマンのディーゼル車はうねうねと続く急斜面をぬって這うように走り、高知から伊予愛媛県に入っていた。急な山合の斜面には一面にミカンの木が植えられていた。そして、突然に前方の視野が広がったかと思うとそこが終着駅の宇和島であった。三方を山で囲まれた宇和島の町の真ん中に宇和島城があった。この城は東北の仙台伊達家の長男である秀宗が江戸時代初期に入城して以来、明治にいたるまで伊達家のものであったという。お城は小さいながらもよく保存整備されており、町の雰囲気とうまく調和しており落ち着いたたたずまいで静かに聳えていた。城内は市の公園となっていて、そこに自生する暖帯林はみごとなものであった。ここではギンメッキゴミグモと思われるが、腹部半分にだけ銀斑がはいっている変わったクモを採集し、谷川明男さんへのお土産とした。帰京の時間がせまり、ここにはほんの2～3時間しかいられなかったが、何故か心を惹かれる町のたたずまいと風情が感じられた。駅前で唐馒头とか牛鬼かまぼこという野趣あふれるお土産を買い、予讃線に乗り込み松山経由であわただしく羽田へ戻った。

四国へは2度目の旅であった。いまから20年程前にサンショウウオを採りに石鎚山や祖谷地方の山中を歩いたことがあった。この頃はサンショウウオとクモにしか興味はなく、ただただ夢中で過ごした点から点への旅だった。今回は少し年齢もいったせいかやや充実した線の旅ができたと思う。どこへ行ってもやはり人との出会い以上の面白さはないような気がする。それに、クモと酒とつまみがつけば、それは贅沢というものだろうか。

〇 会員移動 〇

(入会)

佐藤 邦人：〒243-01 神奈川県愛甲郡清川村煤ヶ谷1104-63 (高校3年生)

大久保克哉：〒216 神奈川県川崎市宮前区有馬1-18-20 黒木荘210 044-852-4866

(住所変更)

長井 芳夫：〒275 本大久保2-4-1508 を 本大久保2-4-1-6 に変更

貞元 已良：〒274 千葉県船橋市田喜野井5-23-4 第一丸藤荘201 0474-66-8748

(退会)

渡辺 好章氏・板倉 泰弘氏(希望退会) 鶴田 明子氏(規約適用)

片岡佐太郎氏が亡くなられ除籍となりました。

74号入会の海老名氏は海老原氏が正当です。訂正をお願いします。

訂正・変更等がありましたらお早めに事務局熊田までご連絡下さい。

会計だより

郵便振替口座 東京 7-74885 東京蜘蛛談話会

入費受領 会費受領

1992年1月～

(敬称は省略させていただきます)

1992年4月下旬 (一般2800円・学生2000円)

1989年(平成 元年)度

渡辺 好章A223.

1990年(平成 2年)度

渡辺 好章A223・高橋 米夫A239.

1991年(平成 3年)度

嶋田 順一A219・渡辺 好章A223・高橋 米夫A239・早乙女 薫A241・清水 徹男A246・

木村 正吾B004(完納).

1992年(平成 4年)度

浪田 龍一A215・谷川 明男A216・田副 幸子A217・萱嶋 志門A218・嶋田 順一A219・東條 清A220・
吉倉 真A221・永田 勝利A222・井野 文雄A225・安田 明雄A226・千国安之輔A227・徳本 洋A228・
朝倉 幹晴A229・大河内哲二A230・大石 洋人A232・甲守 崇A233・長井 芳夫A235・熊田 憲一A236・
鶴崎 展巨A237・山本 一幸A238・高橋 米夫A239・佐久間良三A240・早乙女 薫A241・中平 清A242・
長島 忠義A243・木庭 奏A244・前川 隆敏A245・清水 徹男A246・小滝 一孝A247・棚沢 新A248・
加藤むつみA249・宮園真理子A250・宮園あがさA251・須賀 瑛文A252・田中 徳久A253・稲葉 茂代A254・
海老原憲昭A255・加村 隆英A256・大野 正男A257・鶴田 忠雄A258・吉田 嗣郎A259・福島 彬人A261・
坂寄 廣A262・古川 渉A263・布施 佳子A264・増原 啓一B001・中島 祥吉B002・木村 正吾B004・
著波 祥平B003(一部)・近藤 昭夫B005・畑守 有紀B008・佐藤 邦人B010・久保田克哉B011・
古浜 隆B012・浅間 茂B013・小峰 光弘B015・吉田 真B017・新海 栄一B018・加藤輝代子B019・
高橋 祐子B020・松本 誠治B021・小澤 實樹B022.

1993年(平成 5年)度

嶋田 順一A219・立川 晴二A224(一部)・石野田辰夫A231・阿佐見正起A234・高橋 米夫A239・
長島 忠義A243・鶴田 忠雄A258・田中 穂積A260・古川 渉A263・布施 佳子A264・近藤 昭夫B005・
日下部光代B006・林 秀幸B009・浅間 茂B013・高橋 登B014・高橋 祐子B020・小澤 實樹B022.

1994年(平成 6年)度

石野田辰夫A231・阿佐見正起A234・古川 渉A263・布施 佳子A264・林 秀幸B009・高橋 登B014・
梅林 力B016.

1995年(平成 7年)度

布施 佳子A264(一部).

○会費の問い合わせには受付番号(A000・B000)
を明記してください。

寄付

○渡辺 好章氏 ○大石 洋人氏 ○吉田 嗣郎氏 ○古川 渉氏 ○例会参加者一同
石野田辰夫氏(例会に)

会費の納入状況につきましては、宛名氏名に記入してある年号を御覧下さい。記入してある年号まで会費が
納入されております(1992年4月下旬現在)。会費は前納制ですので、まだの方はお早めに納入をお願い
します。

事務局(会計を含む)〒221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199 熊田 憲一
領収証の必要な方は振替用紙通信欄にその旨お書きください。

INFORMATION

高校生たちの熱心な フィールドワークの成果

日本動物植物学院 第4回JAPPAネイチャーコンテストから

年々、地球環境問題への意識が高まり、自然に関するテーマでの写真コンテストや作文の一般公募が増えている中、高校生を対象とした、第4回・JAPPAネイチャーコンテストの入賞作品が発表された。

このコンテストは、専門分野に進む前の若い人たちの自然への関心を高めるのが目的で、4年前から全国の高校生に向けて公募が開始されたもの。主催は日本動物植物専門学校。同校は、二年制のアニマルケア科を始め、獣医看護科、野生動物科、自然環境科などを開設し、動植物に

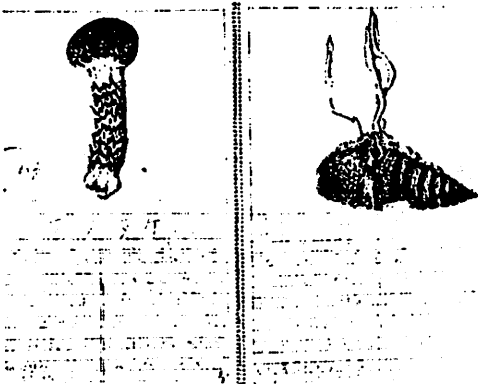
関わる職業につくためのスペシャリストを養成する専門学校である。賞の部門は大賞のほか、優秀賞には各部門賞として、観察記録部門・ネイチャーフォト部門・ネイチャーレポート部門がある。毎年、全国各地の学生から応募があり、環境をテーマにしたものや、共同研究などの力作も見られる。

そうした中で本年度、見事大賞を受賞した作品は、京都・北嵯峨高校一年生、田岡直樹君の研究「第三世界動物(冬虫夏草を見つめて)」。

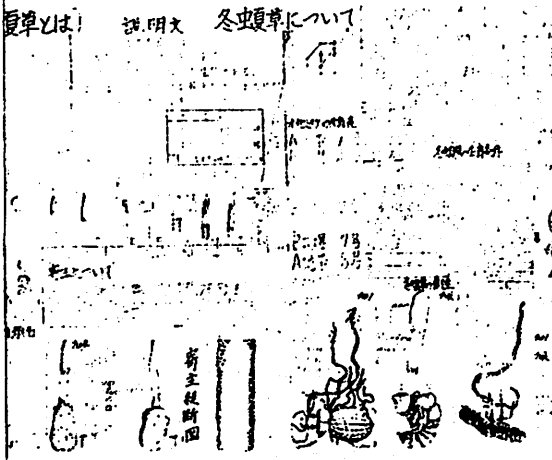
優秀賞には観察記録部門として、宮崎女子高等学校の谷口智英さん、山口陽子さんの、南九州産の小動物研究(第二報)「ジグモ *Alypus karschii* Duf. の形態と生態について(続)」

受賞者の田岡君は、中学一年生の時から菌類に興味を持ち、特に冬虫夏草を観察、採集している。この微小な世界から独自の自然観を育て、環境への問題意識も持ち始めているあたりが、高い評価を得た。

優秀賞には観察記録部門として、宮崎女子高等学校の谷口智英さん、山口陽子さんの、南九州産の小動物研究(第二報)「ジグモ *Alypus karschii* Duf. の形態と生態について(続)」

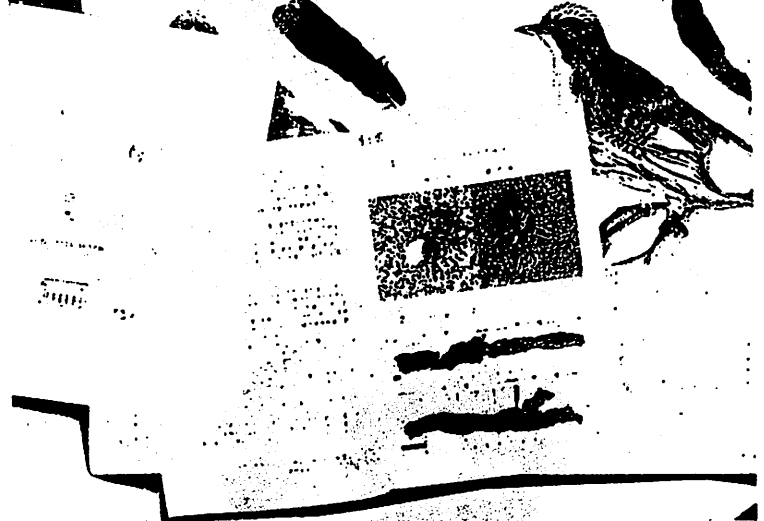


菌類を細かくスケッチした田岡君の大賞受賞作品



冬虫夏草の菌と滋養菌内で採集した標本絵図。観察から得た資料をデータ化

冬虫夏草採集観察場所の鳥について 冬虫夏草採集観察場所の鳥



各地の高校生から送られた研究レポートの中から、大賞、優秀賞が選ばれた。写真はその一部

と愛徳学園高等学校の平山英恵さんらの共同研究「ハムスターの学習実験」が選ばれた。

ジグモ研究は、自然科学部担当教員の指導のもとに、フィールドワークを重ね、しっかりした調査研究がまとめられている。またハムスターのほうは、論文形式ではないが、学校で飼育する動物の行動を観察し、自分たちで得た記録内容をまとめたもので、その独自性が評価の対象となった。

レポート部門では「動物いろいろこぼれ話」甲南女子高等学校の大西三恵子さんが受賞。これはイヌやネコなど身近な動物の生態をエッセイ風に書いた個性的な作品。

今回は、写真の応募も多数あったが、残念ながらネイチャーフォト部門の該当作品はなかった。

審査に当たった日本動物植物専門学校の総評は、「身近な生物を観察して、そこから得た自分なりの考え、感じ方が表現できた作品に評価が高かった」という。

次回、第五回のコンテストは、今年八月から応募が始まる。明日のナチュラリストを目指す若い人たちのフレッシュな研究が期待される。

日時 7月25日(土)～27日(月)

宿泊 静岡県賀茂郡松崎町雲見357

温泉民宿 古石衛門

Tel 0558 - 45 - 0358

一泊料金 大人 8000円(3食込み、税別)

割高ですが時期と場所からご理解を。

交通 ①電車利用の場合 東京——伊豆急線(特急 2時間40分)——伊豆急下田駅
——(バス 1時間30分)——雲見バス停下車——徒歩——古石衛門

東京——新幹線 1時間——三島駅——
——(バス 2時間40分)——雲見バス停下車——徒歩——古石衛門

②自動車利用の場合 東京——東名高速道路 1時間——沼津 I.C——
——(修善寺・土肥経由 2時間30分)——雲見

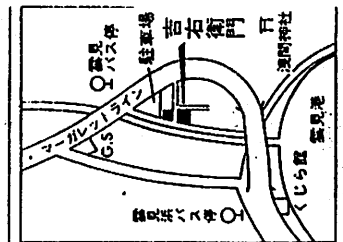
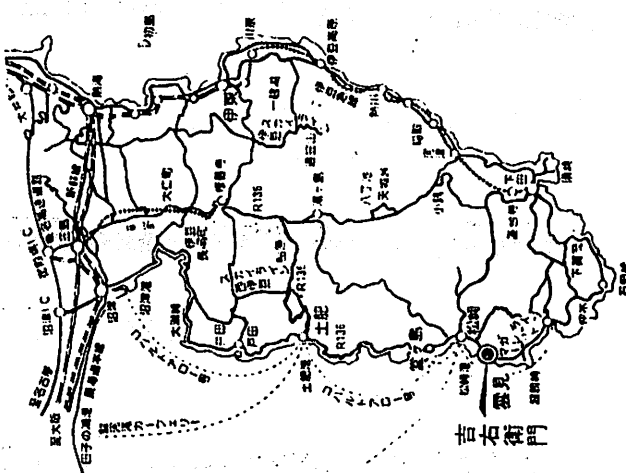
③高速船利用の場合 沼津港——(高速船こばるとあろう 1時間15分)——
——松崎港——(バス30分)——雲見バス停

費用 宿泊・交通費以外に旅行保険および雑費として1000円がかかります。

申し込み 7月11日(土)までに手紙または電話で 新海明まで

〒190 東京都立川市錦町 3 - 12 - 16 - 1010 Tel 0425 - 22 - 2605

早めに申し込み下さい。参加申し込み者には費用や路線バスの時刻表などを別途ご案内します。



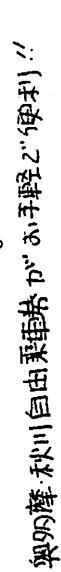
1992年・1993年度運営委員(任期は2年)

池田 博明・稲葉 茂代・小野 展嗣・木村 知之・熊田 憲一・笹岡 文雄・新海 明・
高橋 登・高橋 祐子・谷川 明男・萩本 房枝・平松 毅久。

会計監査(任期同じ)

加藤輝代子・松浦 祐司。

本部:小野 展嗣 事務局会計:熊田 憲一 編集:谷川 明男 通信:池田 博明





大崎茂芳さん

で、放射状に張られた縦糸
なす他の糸にはない。
この糸もちが動物にび
たりくっつく。いくつ
かの有機物質でできて
空中の水分を吸って粘り
を失いにくい仕組みにな
っている。

クモは巣の作製や移動な
ど、用途によって七種類の
糸を使い分ける。その中
でも重要なのがけん引糸。
木からぶら下がったり他の
枝へ移ったりするときに出
す文字通りの命綱だ。
それだけに、一本ではな
く数本の繊維がわたり一度
には切れない仕組みにな
っている。さらに、繊維の
たんぱく質分子は、アミノ
酸の中の硫黄が別のアミ
ノ酸の硫黄と「くっつき合
い」という強力なつなぎで結
ばれている。



熱に強く 弾力十分

300-350度OK/粘着球で獲物取り

ハイクテク繊維へ夢

問題たくさん探れない
ここで、当面はネクタイの
模様の一部に織り込むこと
を計画。針金や模造用シリ
コンターでつくった自動糸
巻器で、「コガネクモ」など
の糸を集めている。

これまで千匹以上から
長さ五十センチ分を採取
目標まであと一歩という。

「クモの糸もたんぱく質
から、クモの細胞にこれ
をつくる情報を持った遺伝
子DNAがある。アメリカ
の陸軍研究所がこのDNA
を突き止めた」と聞いており
大腸菌などの遺伝子にうま
く組み込めば、大量生産で
き、天然の新素材になる。
こんなハイクテク繊維が近い
うちに実現するのではと、
夢をよめるまじっている。



⑨ ショロウケモの横糸の粘着球。強力な
粘着剤(⑧)の数本の繊維でできたけん引糸
はロープのように強じん構造

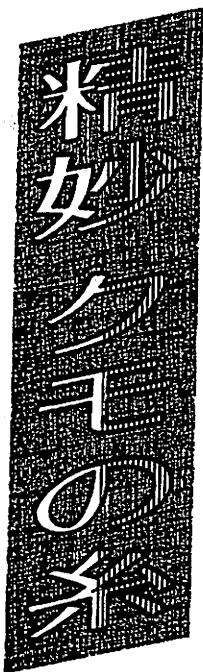
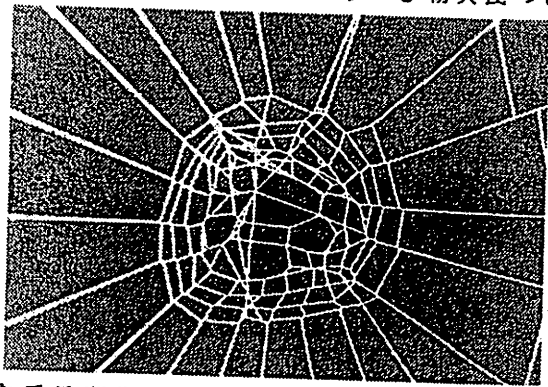
見聞

技術 / 木村健夫氏

(第三種郵便物認可)

さまざまな生物ととま
クモが活動を開始する時期。
その武器である糸はナイロ
ンより熱に強く、弾力性に
富む(なめれた性質を持っ
ている。兵庫県宝塚市、民
間シンクタンク研究員の大
崎茂芳さん(西正)「高分子物
理学」は、その精妙さにひ
かれ、十数年間、くもつと
と研究を続け、クモの糸の
不思議を次々に明らかにし
てきた。(写真はいずれも
大崎さん撮影)

クモの巣にかかった獲物
はなぜ逃げられないのか。
その秘密は実に網巻き状に
張られた横糸にある。オニ
グモの横糸を顕微鏡でのぞ
くと、ミクロのとりもち
が規則正しく並んでいる。
この粘着球は直径二十ミ
(一ミは千分の一)ほど



熱にも強い。耐熱性を特
殊な装置で測ったところ、
三百-三百五十度まで持ち
こたえることがわかった。
ナイロンは二百度、テトロ
ンは二百五十度前後で融解
し始めるという。

破断強度も意外に高い。
大崎さんによると、完全断
面積が同じ標準的なナイ
ロンの一・五倍前後の強度
があり、網や木綿の二倍。
「水分は約一〇%で木綿と
ほぼ同じ。弾力があり、肌
にもなじみやすいはず」と
話す。

こんな特徴を生かした織
物を作るのが大崎さんの
夢。糸の原料はショロウケ
モ(メス)で五-八匹。羊
毛(二十-四十匹)よりか
なり細いが、カイロのまめ
糸並みなので原理的には可

1991年10月3日 毎日新聞(朝) (第3種郵便物認可) 文化新聞



黄金の波に立ちたいね え・渡辺正義

標準教材 音楽教育用レーザーディスク

小学校唱歌集

教育映画祭
優秀賞
受賞



A面 第1・2・3学年編 (16分14秒)

B面 第4・5・6学年編 (23分50秒)

税抜価格 24,000円
(TEL-0942)

可出納品
3巻1巻

(制作 東映(株)教育映画部
音源 キングレコード
制作協力 ネイチャー・メディア)

〒104 東京都中央区
京橋2-4-12

TEL. 03-3272-5791